

# 海部の地理(一)

― 臼杵と佐賀関 ―

矢野 弥生

(会員・佐伯市中山区)

## 三 臼杵の農業と臼杵湾の漁業

減少する農家戸数・農家人口 臼杵市における昭和六十年の第一次産業就業人口率は一五・五%で、全国平均九・三%に比べて高い。第一次産業の就業者総数は二千七百七十九人で、そのうち農業就業者数が二千七百七十五人で、全体の七八・三%に達して最も多く、漁業・水産養殖業が五百六十九人(二〇・五%)、林業・狩猟業が三十五人(一・二%)となっている。

昭和三十五年以降の臼杵市の農家数と経営耕地面積の推移を示すと、表3のとおりである。過去二十五年間の推移を見て、その特徴的なことは、農家戸数の減少と兼業農家の割合が増加してきたことである。これは、我が国における経済の高度成長に伴う産業構造の変化を端的

に物語っている。

また、経営耕地面積の推移を見ても、耕地面積は激減しており、昭和三十五年に比較し、同六十年までの二十五年間に臼杵市の耕地面積は二千八百一十ヘクタール(減少率六四・一%)減少している。これは、工業化や都市化に伴い、工場用地や宅地などに転用されたことが大きい。更に、国の減反政策などの影響を受けて、農家の農業経営意欲の減退化に伴う優良農地の耕作放棄による農地の荒廃化も見逃せない。

しかし、耕地の中でも田・畑は減少しているが、樹園地(ほとんど柑橘類)は、昭和三十五年に比べると、昭和六十年は五十ヘクタール増加しており、柑橘などの果樹栽培は、温暖な気候に恵まれた適地作目として今後も期待されている。

表3 臼杵市の農家と経営耕地面積

(単位 戸 ha)

	農 家 数				耕 地 面 積			
	総 数	専 業	第1種兼業	第2種	総 数	田	畑	樹園地
昭和 35	4,020	1,057	1,075	1,888	3,402	2,127	848	427
40	3,661	703	1,031	1,927	1,933	911	600	422
45	3,415	439	918	2,058	1,871	823	437	611
50	3,094	338	563	2,193	1,542	659	304	579
55	2,786	371	398	2,017	1,348	588	246	514
60	2,519	405	172	1,942	1,221	532	212	477

「農業センサス」(昭和40・45・50・55・60)・「臼杵市統計書」(昭和35)による。

## 米・果実・畜産が三大農産物

臼杵市は、三方を山地に囲まれた狭小な平地で、複雑な地形をなしている。しかし、温暖湿潤な気候に恵まれているため、海岸丘陵地では柑橘・果樹が、臼杵・末広・熊崎の三河川の谷底平野では水稻・野菜が、また、山間地域では畜産・養蚕・茶・葉タバコ・シイタケなどを中心とした農業が営まれている。

いま、臼杵市の農業の部門別農業粗生産額を示すと、表4のとおりである。

因に昭和六十年を見ると、農業粗生産額の総計は五十億五千百万円であり、畜産が二十一億三千九百万円で全体の三九・二四%を占めて最も多く、次いで果実十六億四千九百万円(三〇・二五%)、米七億七千万円(一四・一三%)、野菜五億六千六百万円(一〇・三八%)の順になっている。

また、米・果実・畜産で全体の八三・六%を占めて、三大農産物となっている。

最近における傾向を見ると、作物では果実類(主として柑橘)の伸びが著しく、米の伸びが低い。また、畜産

では、中心になる養鶏が伸び悩み停滞している。

更に、生産額は少ないが、臼杵市にはショウガの特産がある。臼杵のショウガ栽培の歴史は古く、明治初年から県下で一位の生産額を誇り、品質も良く、病苗の被害も絶無であったので、種子ショウガとして中国や四国地方に販売されていた。

昭和五年（一九三〇）、当時の作付け面積は九ヘクタールで、生産額は約百トンであった。戦後、二十五年は二ヘクタール、三十五年、三十ヘクタール、四十五年、八十ヘクタールと増加したが、五十五年、四十ヘクタール、六十年、十ヘクタールと減少している。また、昭和四十五年には家野集落が主産地であったが、四十年代後半になると、連作障害を避けて、野村に栽培地が移動している（一）。

### 佐志生の甘夏柑

臼杵市の甘夏柑は、品質・生産高ともに熊本県葦北郡田浦町や愛媛県南宇和郡御荘町（みしょう）と並ぶ三大主産地に成長している。臼杵甘夏の収穫量は、昭和四十

年代より急激に増加を始める。臼杵甘夏の九割近い二百二十ヘクタールほどを栽培している佐志生地区では、昭和三十二年ごろから三十四、五年にかけて、約四十ヘクタールの早期栽培の水田を果樹園に切り替えるなど、本格的な栽培を始めている。

佐志生地区は古くからの夏ミカンの産地であった。いまでは、あの酸っぱい味を覚えている世代も少なくなってきた。それでも当時は大分・別府や県内各地に出荷されていた。それが、戦後の昭和二十一、二年ごろ、当時佐志生農協専務だった佐藤好古が津久見で甘い夏ミカン（川野ナツミカン・昭和二十五年に農林省に種苗名称登録）の話聞いて、これを自宅の夏ミカンに高接ぎしたのが臼杵甘夏の始まりと言われる。

主産地佐志生では、昭和五十九年度から寒さに弱い低地の水田転換四十ヘクタールの甘夏をカボス・キウイフルーツ・ワイ化モモ・ネーブル・レモンなど他の果樹に切り替える事業に取り組み、柑橘の多角化に向けて努力が続けられている。臼杵甘夏の主な出荷先は札幌・東京名古屋・京都・地元大分など広範囲に市場が開拓されている。



佐志生の柑橘園

表 4 臼杵市の部門別農業粗生産額

(単位 100万円 %)

項目	年次		昭和 4 5		昭和 5 0		昭和 5 5		昭和 6 0		
		%		%		%		%		%	
農業粗生産額	2,491	100.00	4,233	100.00	4,825	100.00	5,451	100.00			
作物	作物 計	1,653	66.36	2,465	58.23	2,385	49.44	3,290	60.36		
	米	392	15.74	875	20.67	605	12.54	770	14.13		
	麦・雑穀類	22	0.88	16	0.38	75	1.56	85	1.56		
	いも類	18	0.72	30	0.71	32	0.66	32	0.59		
	野菜	408	16.38	467	11.03	468	9.70	566	10.38		
	果実	560	22.48	862	20.36	934	19.36	1,649	30.25		
	花き	—	—	0	0	5	0.10	4	0.07		
	工芸作物	42	1.69	68	1.61	92	1.91	68	1.25		
養蚕	種苗・苗木類・その他	211	8.47	147	3.47	174	3.61	116	2.13		
	蚕	28	1.12	33	0.78	44	0.90	16	0.29		
畜産	畜産計	805	32.32	1,734	40.97	2,398	49.60	2,139	39.24		
	役肉牛					98	2.03	121	2.22		
	乳用牛					22	0.46	28	0.51		
	豚					769	15.94	760	13.94		
	鶏					1,468	30.42	1,210	22.20		
	その他の畜産					36	0.75	20	0.37		
加工農産物	5	0.20	1	0.02	3	0.06	6	0.11			

「大分農林水産統計年報」による。

## 進む農業生産基盤の整備

臼杵市の農業における規模の拡大や近代化を大きく前進させた事業として、次の点が高く評価されている。

昭和三十七年から始まった第一次農業構造改善事業、昭和四十八年からの第二次農業構造改善事業のほか、土地改良事業などの推進により、一般的に零細規模であった畜産（養鶏）の選択的拡大が行われ、専業化、集団化が形成された。

柑橘も上北・佐志生地区などで大規模な農地造成が行われたほか、久木小野地区の養蚕、南津留地区のカボス団地の造成など、農業の根幹をなす基盤整備が進められた。

また、昭和四十二年から三ヶ年計画で「北津留開拓パイロット事業」が着手され、約四億円をかけて百ヘクタールを造成し、温州・カボス団地とした。このほか、昭和四十四年から始まった国の畑地総合整備事業により、深田・家野地区で農道の整備とあわせて、灌漑施設が整備され、野菜団地が形成された（2）。

更に、昭和六十三年には、県はミカンなど農産物の流

通合理化などを図るため、佐賀関町―臼杵市―津久見市を結ぶ広域農道の第一期として、臼杵市佐志生地区目明から着手している。

一方、灌漑用水についても、乙見防災ダム（昭和四十五年完成・受益面積三百十二ヘクタール）や中ノ川ダム（昭和五十二年完成・受益面積二百五十四ヘクタール）、うち普通畑灌漑百十五ヘクタール）、末広ダム（昭和五十九年完成・受益面積二百五十四ヘクタール）、野田ダム（昭和六十三年度完成・受益面積五十ヘクタール）、うち畑地四十二ヘクタール）などが築造されており、農用水の確保や治水事業が進められている。

また、臼杵市の農業にとって、最近消費者の間から出ている「より安全な食品を」の声に、生産者が対応する努力、米・野菜・果実などの農薬使用や化学肥料を減らす有機農業への新しい試みも一つの課題ではないかと考えられる。

林業では、林家戸数千五百五戸、その保有山林面積は千五百五ヘクタール（昭和六十年）で、林家一戸当たりの保有山林は一ヘクタールの零細経営である。また、特用林産物はシイタケが主体で、シイタケ栽培農家数百十

八戸、ほだ木本数三十万千五百本（昭和六十年）で、一戸当たり二千五百五十五本と少ない。

### 臼杵湾の漁業

豊後水道西岸部の北半を占める臼杵市の漁業は、マグロはえ縄の遠洋漁業・突ん棒（つきんぼう）漁業・まき網・小型底びき・刺網・船びき・定置網・一本釣りなどがあるが、沿岸漁業が中心である（表5・図5参照）。

沿岸漁業の地域的な漁法の状況を見ると、大泊・中津浦地区のカタクチイワシの船びき、佐志生地区のタイはえ縄・一本釣り、深江地区のまき網・磯つき漁業、大浜地区の小型底びき網漁業などに特色がある。

いま、臼杵市の漁業について、魚種別の漁獲量を示すと、図6のとおりである。すなわち、昭和六十年の総漁獲量三千三十トンのうち、マグロ・カジキ類が最も多く全体の一八・三%を占め、次いでイワシ類一四・三%、アジ類一二・四%、タチウオ一二・三%となっており、マグロはえ縄漁業や突ん棒漁業によるマグロ・カジキ類の漁獲やまき網・船びきなどによるイワシ・アジの大量

表5 臼杵市の漁業種類別経営体数と漁獲量(昭和60年) 単位 体 t

区分	漁業種類	まき網	小型底びき	刺網	一本づり		はえなわ		定置網	船びき網	採貝	採藻	その他の漁業	計
					イカ	その他	マグロ	その他						
経営体		4	54	63	24	140	3	71	7	5	13	17	88	489
漁獲量		484	211	186	14	546	338	430	22	429	28	12	330	3,030
"/ (100%)		16.0	7.0	6.1	0.5	18.0	11.1	14.2	0.7	14.2	0.9	0.4	10.9	100.0

「第33次大分農林水産統計年報」により作成。

漁獲があることがわかる。

また、漁船は無動力船が八隻、動力漁船が四百二十七隻で、規模別隻数では、五トン未満が三百九十五隻で、全体の九二・五%を占めている。そのほか、五十トトンが十隻（二・三%）、十一二十トトン十九隻（四・五%）、五十―百トンが三隻（〇・七%）となっており、零細経営が圧倒的に多い。しかし、漁民の漁労技術は優秀で、古くから沿岸・沖合漁業で活躍している。

#### 小型船時代に入った突ん棒漁業

臼杵市の漁業で、特色のある伝統漁法で知られたものに突ん棒漁業がある。この漁法は、海面に浮上するカジキを手投げモリでしとめる勇壮なものであるが、他の漁業に比べて原始的である。この漁業は、現在、臼杵湾南岸に集中して基地があり、漁船数は二十七隻（板知屋十風成五、坪江・柿の浦各四、深江三、鳴川一。昭和六十二年）、漁獲量二百八十四トン（昭和五十九年）で、全国一位である。

この漁業は、大分県で明治三十四年（一八七〇―七二）

ごろから始められたといわれ、臼杵市の風成・板知屋両地区や津久見市の保戸島に長さ七・五メートルくらい突ん棒船があり、豊後水道一帯で操業していた。

明治十七年（一八八四）には、臼杵の中津浦の板井五三郎が、カジキ・マグロを、棒の先につけたモリで突く突ん棒漁法を考案している（3）。

明治末期から大正初期にかけて帆船による突ん棒漁業が発達したが、大正十年（一九二一）ごろから動力船に切り替えられ、周年操業になった。夏から春にかけて長崎県沿岸から朝鮮近海まで出漁し、春からは豊後水道で操業した。

大正十三年ごろに燃料価格の高騰と魚価の割安の為、一時停滞し、マグロ漁業への転業もかなりあったが、次第に再興して昭和十年（一九三五）ごろから宮崎県油津沖合い、更には北海道・三陸沖合いまで出漁するようになった（4）。しかし、第二次世界大戦が起ると、乗組員の徴用・徴兵・大型船の徴発と、突ん棒漁業は壊滅した。

戦後の復興はめざましく、漁船の建造は年と共に多くなり、この間、沖合いへの進出、漁獲能力の増強などに



三ツ子島地区浅海漁場

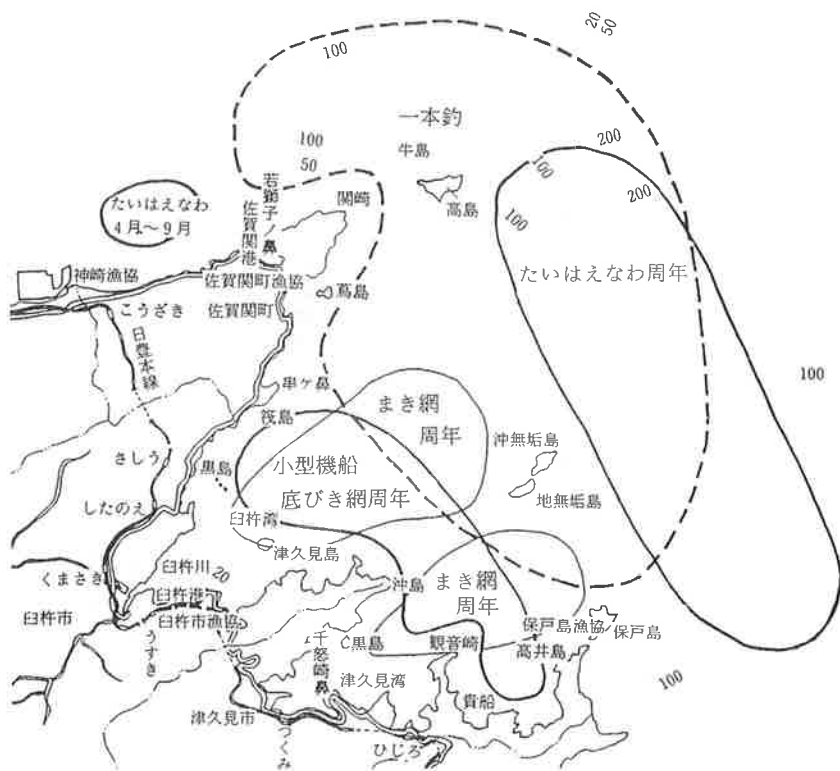


図5 白杵湾の漁場  
 (「マリノポリス基本計画」大分県、昭和58年による)



より、漁船は次第に大型していった。

最盛期の昭和三十五年ごろには二十九トン級が過半数を占めるようになり、隻数も五十八隻を数えた。同じころには、大分県以外の千葉・長崎・愛媛・神奈川・岩手などの諸県でも操業しているが、大分県のような専業船はない。

昭和三十年代には三十一・五十トン級の大型船がほとんどで活気を呈したが、操業海域の制限（沖繩沖・四国沖など米軍や自衛隊の海上演習域となって締め出される）や、水揚げ域などで、昭和四十年代に入ってから大型船の出漁は減少を続け、四十年代後半から急減し（四十五年四十隻、四十七年三十隻、五十年十五隻）、乗組員の沿岸漁業への転進が相次いだ。

最後の大型船が消えたのは、昭和五十二年ごろで、そのころから船主と身内だけの三人乗り組みで仕立てた小型船時代に入った。小型船は二、三匹とっては近い港に陸揚げして、また漁場に出ることを繰り返すなど、新鮮さを売りものにできることや人件費もかからないという利点もある。

最近では、かつてのモリ突き経験者やその息子たちが

次々と五トンから十数トンの船を仕立てて突ん棒漁に戻り、臼杵湾南岸の各港から出漁するようになった。現在突ん棒漁は、対馬と愛媛県内にもそれぞれ数隻ずつある。臼杵市の突ん棒漁業の漁場は、夏・秋に三陸沖や壱岐対馬近海、また、冬・春には伊豆七島へ出漁している。

### 進む臼杵湾の栽培漁業

臼杵市における水産養殖の経営体数や生産量を示すと表6のとおりである。魚類養殖（ブリ・マダイ）、海藻類（ノリ・ワカメ）、貝類（真珠・カキ）が中心で、経営体数三十二、生産量十八万四千三百四十七キログラム生産金額は二億四百八十八万三千円となっており、漁業の総生産額に占める割合は約一〇%と低い。

地域別に見ると、下ノ江湾のカキ養殖（大分県では、昭和九年下ノ江湾で垂下式養殖法で最初に始まる）をはじめ、坪江（愛媛県業者）・佐志生・大浜の真珠養殖、佐志生のハマチ・タイなどの魚類養殖、佐志生・風成のワカメ養殖などが代表的なものである。

昭和五十三年から七ヶ年計画で、大分県は全国にさき

表6 臼杵市の水産養殖業の経営体数・生産量および生産金額(昭和59年)  
(単位 kg 千円)

項目 \ 種類	魚 類			藻 類		貝 類		計
	ぶり	まだい	その他	のり	わかめ	真 珠	か き	
経営体数	3	2	2	5	14	2	4	32
生産量	90,000	24,000	15,100	27,435	23,000	12	4,800	184,347
生産金額	85,500	41,405	45,300	5,136	5,980	21,082	480	204,883

昭和59年度統計情報事務所資料による。

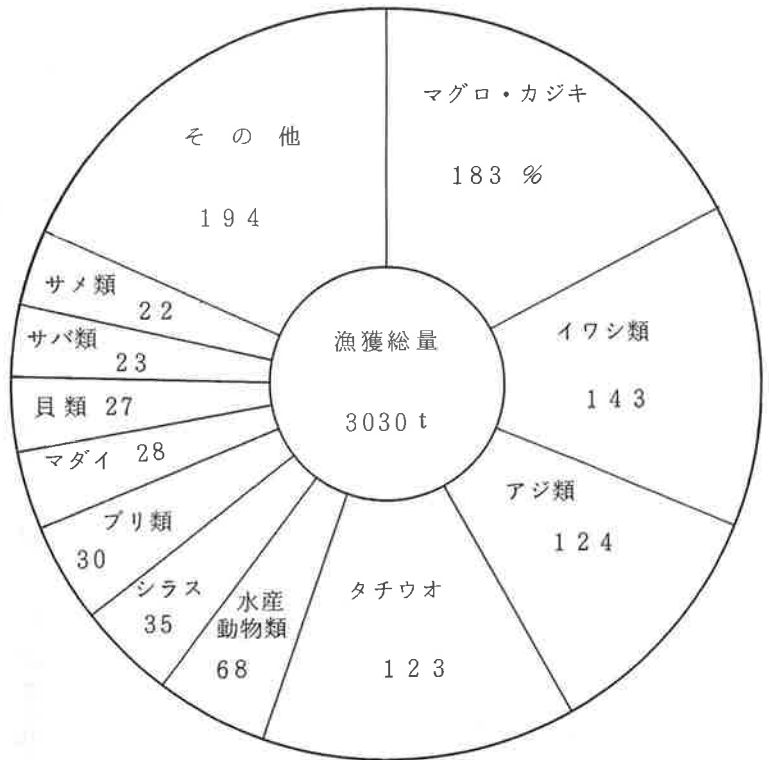


図6 臼杵市の魚類別漁獲量 (昭和60年)

(「第33次大分農林水産統計年報」により作成)

がけて臼杵湾・津久見湾で水産資源管理漁場の造成を行ってきたが、臼杵市では、昭和五十四年度から下ノ江海岸に設置した中間育成場の囲い網で育成したマダイの放流（五十四年度は十四万匹）をはじめ、クルマエビ・アワビの中間育成放流、アサリなどの稚貝の放流など、毎年放流事業が実施されている。

また、臼杵湾内に人工魚礁も継続的に設置されるなど臼杵市の漁業は、これまでの「とるだけの漁業」から、「つくり育てる漁業」、すなわち資源再生を目指す栽培漁業の育成を進めている。一方、内水面漁業については臼杵川・末広川では漁業資源増殖のためにアユ・コイなどの稚魚の放流がなされている。

注(1) 篠田九万太「農業地域の変動―大分県―」(平成元年)。

(2) 「臼杵市制三十年のあゆみ」(昭和五十五年)

(3) 「大分県案内」(復刻版 歴史図書社 昭和五十一年) 明治三十五年。

(4) 「大分県における突棒漁業」三浦光信氏蔵

## 新刊紹介

### 大友宗麟 戦国求道の巻

御手洗 一 而著 新人物往来社

定価 二〇〇〇円

好評の第一巻に続いて第二巻が発刊されました。「二階崩れの姿」以後、求道心と現実の矛盾を解決すべくまどう宗麟の呻吟がつづき、やがてキリスト教にひかれてゆく。その宗麟の姿が描かれています。

